
海と陸との繋がり

イラル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

海と陸との繋がり

【Zコード】

Z3088F

【作者名】

イラル

【あらすじ】

故郷に帰ってきた聖。見慣れた海にやつてくると、旧友で人魚のクリスティーナと出合つた。彼女が人を襲っているという噂を耳にしていた聖は…。

海と陸との繋がり（一）

じつじりと照りつゝ日差し。

それはひどく白い肌に突き刺さる。

生暖かい潮風が髪を撫ぜた。

ベッタリとする感覚。鬱陶しそうに女は長い黒髪を払い除ける。

湿気が高いのか、額から汗がにじみ出していた。

「まつたく、何なのよいつたい。」

女は白いスカーフを首に巻き、サングラスを光らせて不機嫌に言葉を吐いた。

砂浜の向こうに海を見、コンクリートの上で立ちはだかっている彼女の服装は、

海に似合わないきつちりとした白いスースである。道行く人が怪しそうに見るのは、

当の本人はまつたく気にせずにぶちぶちと文句を垂れています。

彼女の名前は聖。顔は美人で街を歩けば誰もが振り返る。

しかし、性格は高飛車でプライドが高く、自己中心的。

典型的な美人な性格ブスと周りから言われていた。

「あの子達がそんなことするわけないじゃないつ。」

しかし、田舎に帰つて来た彼女はそうでもないらしい。

見知った名の噂話を聞いて、わざわざ嫌いな海にまでやつて来たのだから。

まだ不機嫌に愚痴りつつも、彼女は砂浜に降り、海へと勢いよく歩いている。

その度に高いヒールは砂に埋まつた。

「だいたい、皆臆病すぎるのよー。」

噂を思い返す度に聖は眉を潜め、苛立っていた。
それが足の速さを更に速めている。

海につくなり、聖は固まった。

目に入つて来た光景にさつきの怒りも忘れ某立ちになつてゐる。

「あ、ひじりちゃんだ！」

聖よりも高い声が彼女の名を呼ぶ。
海に下半身を埋め、赤い水着で胸を隠す少女は、彼女にっこりと
微笑みかけた。

手には大きなビーチボールを抱えているから、遊んでいたのだろう。

「どうしたの？」

まったく反応を返さない聖に、
金髪のふわふわとした髪を潮風になびかせながら少女は首を傾げた。
きょとんと自分を見る童顔をサングラス越しに見て、聖はわなわな
と震えだした。
そして彼女に怒りをぶつけた。

「どうしたの？じゃないわよーこのアホ半魚人！ー！」

「ひつどーい！私は半魚人じゃなくて人魚よーー！」

聖の言葉に直ぐ様反論をし、元から丸い頬をさらに膨らませ、
下半身でバシャリと水を巻きあげた。

ほんの少し、かい間見れた下半身は魚のような尾びれだった。

それに聖は驚いた様子も見せはしない。

それもそのはず、この人魚、名はクリスティーナ。

愛称はクリスといい、聖とは昔からの知り合いなのだ。

「人魚も半魚人も同じようなもんでしょ！」

水しぶきが上がった箇所を眉を潜めながら見る聖。

また、まだ怒りは収まらないらしく、声を張り上げている。

「何でよー!? 私と半魚人様じゃ比べものにならないじゃないー。」

クリスも負けじと怒鳴り返す。

彼女の言葉に、聖は額に皺をよせた。

「様あー？」

「そうよ。半魚人様は私達が遠く及ばないほどカッコイイの……なんといっても私達の夢は半魚人様と結婚すること。きや、言つちやつた。」

「黙れウカレポンチ。あなたの趣味がイマイチ私にはわからないのよつ。」

うつとりと夢見る乙女になつていて了クリスに、すかさず聖は突つ込みを入れた。

クリスはそれに不満らしく、尾ひれをばたつかせながら抗議の声をあげている。

聖は手をクリスに向けて、彼女を制した。

「クリス。今日は遊びに来たんじゃなくて、貴方に聞きたいことが

あつて来たの。

おふざけは辞めにしてくれるかしりへ。」

「「めん……なに？」

いつになく真剣な聖に、クリスは少し浮かない表情になる。
彼女は口をへの字に曲げ、目だけで聖を見ていた。

「貴方、この海に来る人間を襲つてるつて本当なの？」

嘘だと言つて欲しい。本当のわけがない。

聖はそんな言葉をいつの間にか心の中で唱えていた。
ただ単なる噂であれば、それで全てが片付くのだと。そう信じて。

「本当よ。」

しかし、クリスの答えはその期待を裏切つた。

聖は目を見開いてクリスを凝視する。

また、クリスは気まずそうに視線を斜め右下に落とし海を見つめている。

風が彼女達の髪をなびかせ、太陽の光がじりじりと彼女達を突き刺す。

青い空ではカモメが飛びながら鳴き交わしている。

聖にとつて、過ぎ行く時間はとても長く、永く感じられた。

「……どうして？貴方、私を助けてくれたじゃない。
そんなことするよつた奴じやつ……ないじやない！…」

聖は信じたくなくて、自分に言い聞かせるように叫んだ。
クリスを見ることができずに下を向いて。

クリスと聖は幼い頃に出会った。

それは、聖が父親について海へ遊びにきた時のことだ。
お決まりの「」とく、彼女は泳いでいる最中に波に没されてしまったのだ。

そこで聖が見たのは父親ではなく、

透き通るようなエメラルドグリーンの瞳と、
水に濡れているにもかかわらずふわふわとした金色の髪、
エラのような海と同じあおい耳。

そして、自分に向けられた笑顔だった。

それが聖には今でも忘れられないクリスの印象で。

聖母のような柔軟で優しい笑みが聖にとつて彼女なのだ。
それとはまったく逆の彼女の答え。

それは聖にとつて、とてもショックなことだった。
そう、憧れが打ち砕かれたような、そんな感じの。

「……聖ちゃん。聖ちゃんは海が怖いのよね？」

聖の問いに答えず、クリスは聖に聞いた。

その声からは何を考えているのか読み取ることができず、聖は眉を
潜めた。

「そうよ……溺れてから怖いわ。苦手よ。

海の青が視界に入るたびに、
海のざざなみが耳に聞こえるたびに、
潮風の匂いがするたびに、
身がすくむ思いだわ。」

聖は息をゆっくりと吐きながら、正直に答えた。声は震えている。

「……私ね。人間が怖いの。

聖ちゃんが海を怖いように、私は人間が怖いの。」

クリスのその言葉に、聖は何を返していいのか戸惑った。

しかし、クリスもまた、聖同様に自分の気持を正直に述べている。二人とも相手に嘘をつきたくないのだ。

聖が黙つていると、心中で自問自答を繰り返していたクリスが首を横に振った。

聖はなんとも言えない表情でクリスを見守っている。

「ううん……正確には違う。私が怖いんじゃないの、私の友達が怖がってるの。」

クリスは顔を上げ、聖をじっと見つめた。

どうやら答えが完全に出たりじく、エメラルドグリーンの瞳に迷いは感じられない。

「……友達って？」

聖は見つめ返した。そして、クリスの次の言葉を促す。

クリスは聖から視線を外し、そつと海の中から手を出した。

白い小さな手に、ちょこんと申し訳程度に白いマリモが顔を出す。

「うみちゃん。」

その白い毛に覆われた小さなマリモを見て、聖は名を呼んだ。

うみちゃんと呼ばれたそれが、返事をするかのようにもそもそもクリスの手の上で動く。

聖が懐かしそうにうみちゃんを見て微笑むのを見て、クリス眉を潛め苦笑つた。

そして、躊躇いながらも聖に話出す。

海と陸との繋がり（2）

「海坊頭のうみちゃんね……人間の子供に仲間が殺されたの。その子、まだ巨大化することできなかつたんだつて。食べるわけでもないのに、気味悪がられて殺されたのよ。」

「……だつたら尚更じゃないつ。

貴方がそうやつて人間を襲つてたら、気味悪がられるわ！怖がられるわ！！」

そしたら、誰かが貴方を殺しに来てしまつ……。」

クリスの言葉は、聖にもよくわかつた。

だけど、クリスがしていることは自滅に近い。
そう思つてしまつと焦りと、クリスがいなくなるのではないか。
という不安が聖に襲つてきた。

聖は両の手で顔を多い隠す。

カタカタと肩を震わせながらなんとか耐えるような形で。

「聖ちゃん。人間はね、繋がりを壊すの。

自然との繋がりも、他の生き物との繋がりも。

全部、全部。壊してるんだよ。私も、もうここにしか居られない。」

クリスは聖に言われたことにまったく触れようとはしなかつた。まるで、わかっているのだと。そういう感じで。

けれど、淡々とした口調は聖に何も読み取らせてはくれなかつた。聖はサングラスを外して涙を拭い、黒い細い瞳がクリスを捕える。

「どうこう」と？

聖はクリスがこの世界の住人でないことを知っていた。
だからこそ最後の言葉が気になつたのだ。

ただ、海の中の別世界の住人と聞いたことがあるだけで、
聖は本当のところ彼女がどこに住んでいるのかは知らない。
毎日この浜辺にいるわけではないことからして、
少なくとも何処かに家はあるだろう。

「聖ちゃんには、まだ教えてなかつたね。」

やつとクリスは笑んだ。その笑顔は無邪氣で楽しそうだ。
それにつられて聖も笑む。

「海が私の世界と聖ちゃんの世界を結んでるの。」

「海が？」

一人とも、やつとまでの緊迫した雰囲気はぱりとやが。
今では楽しいおしゃべりになつていて。

それは、クリスが自分の秘密を聖に話すといつ親しみ感から来るも
のなのか。

それとも笑顔の効力か。どちらにしても和やかな雰囲気である。

「海つて鏡みたく風景を映し出すでしょ？」

あれがね、本当は別世界に通じてるの。

よくよく見れば違つところに気付くさよ。

「うー。まったく信じられないわ。」

クリスの言葉に驚きながらも批判の声を上げる聖。

今までに聞いたこともない事を容易く信じるのは難しいよつだ。

聖はとめどなく流れの汗を拭いながら上着を脱いだ。じりじりとする暑さに耐えられなかつたのだ。

「嘘じやないよ。

ただ、繫がる場所は狭いし、繫がつてゐる時間も短いことが多いから見つかり難いのつ。

蜃氣樓つて知つてゐ?」

「馬鹿にしないでよ。そのくらい知つてゐわ。

温度さがあまりに違つたりすると、光の屈折でその場にないものが見えるのよ。」

「陸のはそうちかもね。

だけど海のそうちつた現象は少なからず違つ理由もあるのよ。」

自信満々に答える聖の鼻頭を折るよつて、クリスは人指し指を振つて否定する。

聖は、口をへの字にし何よつ。という顔でクリスを見た。それに促されたのか、クリスは言葉をつむぐ。

「あれは私の世界の船よ。

一瞬繫がつたその場所に、私の世界の船があつたの。

あ、信じてないね?」

眉をぴくぴくと動かし、口を引きつらせてゐる聖を見て、クリスは頬を膨らませた。

「消えちやう船とかあるでしょ?

あれだつて私の世界に迷い込んだりしてゐんだからつ。」

さうに続けるクリスに、聖は呆れたように溜め息をついた。

「いいわ、百歩譲つてそれを信じてあげる。

それで？なんで貴方は此処にしかいられないの？」

クリスを急かすように聖は問うた。

その言葉は一瞬で場を氷つかせた。緊張が走る。

重々しくクリスは口を開いた。

「私の世界と二ことの繋がりが絶たれようとしているの。」

「……。」

「つ……海が汚れたから！海を人間が汚したからよつ――！」

海は汚れて光を失った。

海は、何も映さなくなつたのよつ――！」

セキを切つたようにクリスは叫ぶ。

大きな瞳からボロボロと涙が溢れ落ちた。

聖はただ黙つたままクリスを凝視している。

聖は、胸が締め付けられた。

胃がぐるぐると回つて、見ているのに何も認知できないでいる。

ただ彼女の頭の中は真っ白になつたのだった。

「ねえ、クリス。それならなんで貴方は此処にいるの？
帰れなくなる前になんで帰らないの？」

頭は何も考えられないのに、疑問が口をついた。

聖は自分でも戸惑つたように眉を潜める。

クリスは涙を溜めた目で聖を睨みあげる。

それに聖は圧倒され、口をつぐみ生睡を飲んだ。

「…」のまま帰るなんてできないよつ。

人間に復讐してやるんだつ。

海との繋がりを壊した奴らを、私は許せない！」

そう強くクリスは訴えた。人間である聖に向かつて。けれど、聖は自分に何ができるのかわからなかつた。ただ、人間はたかが一人何かを訴えても、何かを変えることは難しい。

そう聖は大人になつて確信していた。

約束なんてできない。

きっと海を綺麗にするなんて。

「クリス……ごめんなさい。

私には貴方に止めてと言つことしかできない。お願ひだから……。

考え直して。と小さく続け、聖はクリスに背を向けた。肩が小刻に震える。

「明日……また来るからつ。」

聖はクリスが声を発する前に、それだけ言って駆けて行つた。

聖が走りさつた後には、涙で濡れた少しの砂と、

寂しげに見送るエメラルドグリーンの瞳があつた。

海と陸との繋がり（3）

夜中、聖は久しぶりの自分の家の自分の部屋で寝返りを打つていた。この家は今は聖しかいない。

聖の親は他の家に住んでいた。それは、今も昔も同じこと。静かな部屋で、うつすらと目を開け。聖は考えていた。クリスは、いつからそうやって考えていたのだろうか。いつから……あんな顔をするようになつたのか。

今も人を襲つてゐるのだろうか。いろんなことが頭の中を駆け巡る。布団に入つてから、もう数時間が経過していた。それなのに、疑問はひつきりなしに聖の頭の中に浮かび上がつては消えていく。だから、寝付けなかつた。

「へへへ…」

幾度目かの寝返りを打つたその時、微かに聖の耳が音をキャッチした。

すぐさま飛び起きた聖。そのまま、上着を手に取ると家から飛び出した。

聖の家は、海からそう遠くない場所に位置していた。少し坂道を駆け下りれば、海が見えてくる。

小さな明かりが聖の目に入ってきた。数人の男が何かを喚いている。聖の心臓が大きく鳴り響く。

もしかしたら。そんな言葉が彼女の頭の中を繰り返し駆け巡った。荒い息をしながら、それでもスピードを落とさずに聖は走る。明かりが段々と大きくなる。

次に目に入ったものに、聖は心臓が止まりそうになつた。

「う……嘘。嘘、ウソ、うそうそうそ……」

小さくウソと連呼する。

やつとのことで、明かりの近くまでやつてきた。

もう、肩で荒く息をして、喉がカラカラに渴いている。

クリスが、漁をするための縄に捕らわれて岸に上げられていた。

魚のような尻尾が松明と月明かりで照らされている。

その周りにいる男達。

何もかもが自分が想像したとおりで、聖は腰が抜けそうになつた。

「クリスつ。」

小さく彼女の名を呼んだ。クリスはゆつくりと顔を上げる。涙目で、それでも聖を見るとこつこつと笑つた。

「やつぱりね、私。人間の考えることがわからないよ。聖ちゃん。」

クリスは声は出さずに、口だけをそつ動かした。それをわかつたのは聖だけ。

「あんた達、クリスを離しなさいよ！――！」

息を整えて、叫ぶ。しかし、駆け寄ろうとした聖を一人の男が捕まえる。

「なんだ？聖。お前、この化け物の仲間か？」

嘲笑うかのように一人の男が言つた。聖はそいつをキッと睨みあげた。

「違ひつ。友達よー化け物なんかじゃないわーー！」

「はは、頭おかしいんじゃないの？化け物が友達だつてよ。」

聖を掴んでいる男が、彼女を見下しながら言つ。

それに聖は一生懸命に横に首を振つた。

「化け物じゃないつ。クリスは、クリスは良い子なのつ！
私を助けてくれたんだから！ー！」

「化け物だよ。お前、妄想じゃないのか？
こんな奴が人を助けるわけないだろ。」

「やつや、助けるビコロが食われちまつ。」

「美味しく食べるためには肥やされてたんじゃないの？..」

聖の必死の訴えに、男達は口々に罵りの言葉を投げる。

聖は絶句した。

自分がどんだけ訴えても、口こりの考へることを変えることがで
きない。

そう思つてしまつたから。

しばらく固まつていたが、助けを求めるように視線を動かした。
目に付いたのは、弱弱しく自分を見るクリスだつた。

それと同時に心の中で何かが弾ける。

「離してーーー！」

必死にもがいて男達の手から逃れる聖。
そして地を蹴つてクリスに駆け寄つた。

近くで見ると、クリスの肌には無数の痣や切り傷が目に付く。彼女を助けなければ。その想いが聖の中でこだまする。しかし、それは既に遅いことだった。クリスの身体が段々と透き通つていく。

男達は聖の霸氣に蹴落とされ、呆然と一人を見ていた。

「馬鹿つ。陸になんて上がつたらあんた。死んじゃうじゃなーつ！」

聖はクリス抱きかかえようと手を伸ばす。しかし、クリスはその手を払いのけた。それに聖は小さく声を出し、目を見開いてクリスを見た。そして。なんで？と小さく呟く。もう、クリスの身体は段々と泡になっていた。

「いいの。もう遅いもん。これで少しでも海を汚さないで。っていう想いが伝わればいいなあ。」

いつもみたく、あどけない笑みを浮かべるクリス。

その笑顔から、一筋の涙がこぼれ落ちた。

聖は、無意識のうちにもう一度手を差し伸べて、クリスを強く抱きしめていた。

聖の目からも涙がこぼれ落ちる。

何かを言いたいが、言葉にならなくて。聖はただ嗚咽をもうすだけ。

「聖ちゃんの心にも残れてよかつた。ありがとう。大好きだよ。」

小さく耳元で、クリスは聖にそう言った。

その瞬間、聖はクリスの温かみを感じることができなくなっていた。
聖の手にある感触は、冷たい泡だけ。

「クリス！クリスティ——ナ——ツ——！」

聖は叫んだ。涙がとめどなく溢れて自分では止められない。
胸が痛い。

何かが突き刺さつてゐた。また締め付けているみたいで。
呼んでも返事は返つてこなかつた。

聖は、ぎゅつと残つた泡を握り締める。
クリスはもう戻つてこないんだ。と頭の中で鳴り響いた。

「クリス……生きてて欲しかつたのに……。」

誰にも聞こえないほど小さな言葉で、聖は呟いた。
そして、嗚咽を噛み殺し、涙を拭うと、すつと立ち上がつた。
男達が何かを言つてゐるが、それは聞こえない。
ただ一言。聖は男達に言つた。

「化け物なんて、本当はないのよ。」

冷たい印象を「えるくらい」、彼女の言葉は軽蔑に満ちていた。
男達は絶句し、それ以上彼女に何も言わなかつた。
それから聖は、自分のうちへ早足で帰つていつた。
もうすぐ日が昇に帰る時間だ。
けれど、聖にはそんなこと関係なかつた。頭の中はただ、クリスのことばかり。

海と陸との繋がり（4）

聖は家ると、すぐさま洗面所へ駆け込み顔を洗つた。

どんなに洗つても、涙は次から次へと溢れてきりが無い。

仕方無しにタオルで顔を力いっぱい拭くと、台所へ駆け込んで何かを探し始めた。

見つかったのか、ゆっくりとソレを握る。

握つたものはナイフだった。握つた手に力が込められる。

ばさつ

聖は長かかった黒髪を無造作にナイフで切り落とした。
肩よりも上になつた髪。

「馬鹿つ。馬鹿、バカバカバカつ……。」

ナイフを置き、その場に崩れ落ちる。

小刻みに肩を震わし、頬を暖かい涙が伝う。荒く息をして、ため息をついた。

「……くそつ。男に戻つたつて……約束したあんたがいないうら。
意味ないじゃんかつ。」

聖とクリスは、ある約束をしていた。

それは二人がであつて間もない頃。

聖は、ナイフを握つたまま、ぼーっと、クリスとの思い出を思い出す。

「聖。ひどーい！何でわづかんないのー…？」

「俺は男だつ。そんなんわかるかよ…」

あの日、聖とクリスはいつものように浜辺で言ひ合つていた。
半魚人様を思つて乙女心について。で。

「なによ、なんでわからんないのー…？」

クリスが尚も抗議の声をあげる。聖は困つたよつて考えた。
いつもだつたら、聖はその後を誤魔化して、遊ぶほうへとクリスを
誘導する。

しかし、この日はちがかつた。

「なつてみなけりや、何もわからんないよ！

乙女心何て、女の子になんなきやわからんないつ。」

思わず出た言葉だつた。

それでも聖は、我ながらによくできた答えだと言つて終わつた後に思
つたりもする。

しかし、実際は自分の首を絞めることになるのだが。
次の思いもかけないクリスの発言のせいで。

「そつか。じゃあ、聖。女の子になつてー！」

「はあ！…？」

ひとつひとと笑顔で言つクリスと、それに思わず驚きの声を上げ目を
点にする聖。

いきなり何を言つんだ。と聖はクリスを凝視する。

「お、男が女になれるわけないだろ！」

必死にクリスに言つたが、彼女はにつこりと笑つたまま。その笑みに不気味さを感じて、聖は一歩後ずさつた。悪寒が走つたのだ。

「大丈夫だよ。聖に私が神様にお願いしてあげるから。神様はね、私たちのお願いを一つ。聞き届けてくれるんだよ。今度から聖ちゃんつて呼ぶね！」

やつぱりいつもの笑顔のまま言つクリス。聖は身の危険を感じギギギと身体を後ろに向ける。

「聖。やつぱダメかな？私ね。聖にも私の気持ち、わかつてほしいの。」

だんだんと小さくなつていく声に、聖は耐え切れなかつた。今度は勢いよくクリスの方に振り向き、大声で叫んでしまつた。

「いいよ！女にしろよ！クリスの気持ち、わかつてやるよ！そんで、クリスの気持ち、わかつてやる！約束だ！！」

次の瞬間だ。目の前が真つ暗になつたのは。

それから自分は女になつた。元に戻るのは、クリスの気持ちをわかつたとき。

それか、クリスが死んだとき。

聖は昔を思い出して鼻で笑つた。

昔からクリスは突拍子もないことを言つたりやつたりするのだ。

それを、昔はなんの抵抗もなく信じてた自分を懐かしく思つ。もつ、そんなふうにクリスと話せないのかと思うと、胸が締め付けられ聖はまた涙が溢れてきた。

コンコン

ドアが叩かれる音がした。

聖は起き上がり、涙を拭う。そして、首を傾げながらドアへと向かつた。

この家に人が尋ねてくることなんて滅多に無いのだが。それにだいたい、今は誰とも会いたくなんかなかつた。

コンコン

しかし、焦らすようにまたドアが叩かれる。

聖は、仕方無しにゆっくりとドアを開ける。

日が昇り始めていた。影でドアの前に立つている人物が聖にはよくみえない。

「……何のようです……っ！？」

ゆつくりと上がる日差しのおかげで、段々とその人影は形を成す。ふわふわな金髪に、エメラルドグリーンの大きな瞳。あどけない優しい笑顔。

クリスのようだった。だけど、聖は苦笑つた。

クリスがいなくなつたことで、あまりにも寂しくて幻想でも見てる

んだ。

と自分に言い聞かす。クリスは人魚だ。人じゃない。

目の前の女の子は人間の耳に白いワンピースから人間の足が見える。

「……こんな朝早く、何のようですか？」

「何を、そんなにしょげているんですか？」

少女は率直そう言った。その言葉に、聖は眉を顰めて彼女を見る。少女は笑つたままもう一度、どうしたんですか？と聞いてくる。聖はじつと少女を見た。見れば見るほど、彼女はクリスにそっくりで。

「……友達を一人。守れなくてね。」

不思議と聖はその子に話しかけていた。本当は、話すつもりなんてない。

とそう思いながらも、口から出る言葉は止められなかい。

「私が、たつた一人で何を言つても、受け入れられないんだって実感して。

私一人じゃあ、何も変えられないんだ。つて絶望したんだよ。」

一気に言つてから長いため息を吐いた。しみじみと夜の出来事をかみ締めて、また痛い思いが込み上げてくる。

目頭が熱くなるのを、聖は必死に抑えていた。

「そんなことないよ。聖ちゃん。聖ちゃんの思いは、神様と私に届いたよ。」

聖は名前を呼ばれたことにびっくりして彼女を凝視する。

いつもと変わらない、記憶と同じ笑顔がそこにあった。

聖はぽかんと口を開けていたが、いつの間にかその口は綻んでいる。

「……クリス。クリスティーナ？」

「やうだよー聖ちゃん！！」

笑顔で、答える彼女。口が綻ばないようになると必死に抑えながら、聖はまた聞いた。

「本当にクリス？」

「やうだよーほり、うみちゃんも一緒にー」

そう言って、手の中を見せる彼女。

その手の中には小さくてもそもそもと動く白いマリモ。もというみちゃんが静かに彼女の手に包まれていた。

「うみちゃんー……クリス。クリスなんだねーおかえりーー！」

「ただいま、聖ちゃんーー！」

目の前の少女は聖に勢いよく抱きついた。

いつたいどうなったのか、聖はまったくわからずに田を白黒させる。

それでも、自分の名前を呼ぶ彼女が、クリスなのだと。やう実感して抱きしめる。

クリスは抱きついたまま嬉しそうに言った。

「あのね、あのね。聖ちゃんがずっと前に言ったじゃない。
なつてみなけりや わからない。つて。

あの言葉よ。私と神様に届いたのは、あの言葉なのー。」

興奮気味に大きな声を耳元で喚かれ、聖は頭がくらくらした。
でも、元気な聞きなれた声を聞いて、笑顔がこぼれる。

「クリス、それはどうこうこと?」

「聖ちゃん。女の子になつて、女の子の気持ち判つた?」

首を傾げて聞くと、まだ興奮気味にクリスは聖に問いかけを返した。
クリスがじつと聖の瞳に目を合わせる。

「そうだなあ。クリスの気持ちはわからなかつたけど、
聖ちゃん。つて女の子の気持ちはわかつたよ。うん。そう、わかつ
たんだ。」

聖も嬉しそうにクリスに返す。

「そう、それならいいのつ！
だからね、私も人間になつてこい。つて。そつ神様が言つたの！
聖、貴方一人の、たつた一つの言葉よー！
それには、もう一つ。聖ちゃん言つたよね。私に生きて欲しかつ
た。つて。」

また、嬉しそうにクリスはぎゅっと聖に抱きついて耳打ちする。
最後の言葉はそつ、クリスが消え去つた後にぼつりと聖が呟いた言
葉だ。

聖は、恥ずかしそうに頬を赤らめる。

「聖、おかえりなさい。」

「ただいま。」

抱きしめ返して、聖は思った。

たつた一人の人間でも、

たつた一つの言葉でも、

それだけで何かが変わることがあるんだって。

何も変わらないとその時は思っても、

見えないところで変わったり、

何年も後になつて変わる事だってあるんだ。と。

なにせ、この後。海はゆっくりと綺麗になつていったんだから。

聖とクリスと、皆なの手によつて。

おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3088f/>

海と陸との繋がり

2010年10月28日06時30分発行